

飴チョコの天使

小川未明

青空文庫

青い、美しい空の下に、黒い煙の上がる、煙突の幾本か立
 つた工場がありました。その工場の中では、飴チョコを
 製造してました。

製造された飴チョコは、小さな箱の中に入れられて、方々
 の町や、村や、また都会に向かつて送られるのでありました。

ある日、車の上に、たぐさんの飴チョコの箱が積まれました。
 それは、工場から、長いうねうねとした道を揺られて、停
 車場へと運ばれ、そこからまた遠い、田舎の方へと送られるの
 であります。

飴チョコの箱には、かわいらしい天使が描いてありました。こ

の天使の運命は、ほんとうにいろいろでありました。あるものは、くずかごの中へ、ほかの紙くずなどといっしよに、破つて捨てられました。また、あるものは、ストーブの火の中に投げ入れられました。またあるものは、泥濘の道の上に捨てられました。なんといつても子供らは、箱の中に入っている、飴チョコさえ食べればいいのです。そして、もう、空き箱などに用事がなかつたからであります。こうして、泥濘の中に捨てられた天使は、やがて、その上を重い荷車の轍で轢かれるのでした。

天使でありますから、たとえ破られても、焼かれても、また轢かれても、血の出るわけではなし、また痛いということもなかつたのです。ただ、この地上にいる間は、おもしろいことと、悲

しいこととがあるばかりで、しまいには、魂たましいは、みんな青あおい空そらへと飛とんでいってしまふのでありました。

いま、車くるまに乗のせられて、うねうねとした長ながい道みちを、停てい車いし場やばの方ほうへといった天てん使しは、まことによく晴はれわたった、青あおい空そらや、まこた木だち立ちや、建たて物ものの重かさなり合あつていゝあたりの景けし色きをながめて、ひとごとひとごとと独ひり言ごとをしていました。

「あくろの黒くろい、煙けむりの立たつていゝ建たて物ものは、飴あめチヨコの製せい造ぞうされる工こう場じやうだな。なんといゝ景けし色きではないか。遠とくには海うみが見みえるし、あまちらにはにぎやかな街まちがある。おなじゆくものなら、俺おれは、あまちの街まちへいってみたかつた。きつと、おもしろいことや、おかしいこととがあるだらう。それだのに、いま、俺おれは、停てい車いし場やばへいっ

てしまう。汽車きしゃに乗せられて、遠いところへ行ってしまいうちにちがいない。そうなれば、もう二度と、この都会とかいへはこられないばかりか、この景色けしきを見ることもできないのだ。」

天使てんしは、このにぎやかな都会とかいを見捨てて、遠く、あてもなくゆくのを悲しく思いました。けれど、まだ自分は、どんなところへゆくだろうかと考えると楽しみでもありません。

その日の昼ひるごろは、もう飴チョコあめは、汽車きしゃに揺られていました。天使てんしは、真つ暗まくらな中なかにいて、いま汽車きしゃが、どこを通とおっているかということはわかりませんでした。

そのとき、汽車きしゃは、野原のほらや、また丘おかの下したや、村むらはずれや、そして、大きな河かわにかかっている鉄橋てつきょうの上うえなどを渡わたって、ずんず

んと東北とうほくの方ほうに向むかつて走はしつていたのです。

その日ひの晩ばん方がた、あるさびしい、小ちいさな駅えきに汽き車しゃが着つくと、餡あめチョコは、そこで降おろされました。そして汽き車しゃは、また暗くらくなりかかった、風かぜの吹ふいている野の原はらの方ほうへ、ポツ、ポツと煙けむりを吐はいていつてしまいました。

餡あめチョコの天てん使しは、これからどうなるだろうかと、半なかば頼たよりないような、半なかば楽たのしみのような気き持もちでいました。すると、まもなく、幾いく百ひゃくとなく、餡あめチョコのはいつている大おおきな箱はこは、その町まちの菓子屋かしやへ運はこばれていたのであります。

空そらが、曇くもっていたせいもありますが、町まちの中なかは、日ひが暮くれてからは、あまり人ひと通とどりもありませんでした。天てん使しは、こんなさび

しい町まちの中で、幾日いくにちもじつとして、これから長い間ながあいだ、こうして
いるのかしらん。もし、そうなら退屈たいくつでたまらないと思おもいまし
た。

幾百いくとなく、飴あめチョコの箱はこに描えがいてある天使てんしは、それぞれ違ちがつ
た空想くうそうにふけていたのでありましよう。なかには、早はやく青あおい
空そらへ上のぼつてゆきたいと思おもつていたものもありますが、また、どう
なるか最後さいごの運命うんめいまで見みてから、空そらへ帰かえりたいと思おもつていたも
のもあります。

ここに話はなしをしますのは、それらの多おほくの天使てんしの中なかの一人ひとりである
のはいうまでもありません。

ある日ひ、男おとこが箱車はこぐるまを引ひいて菓子屋かしやの店頭みせさきにやってきました

た。そして、餡あめチヨコを三十ばかり、ほかのお菓子かしといっしよに
 箱はこぐるま車なかの中に収おさめました。

天使てんしは、また、これからどこへかゆくのだと思おもいました。いつ
 たい、どこへゆくのだらう？箱はこぐるま車なかの中なかにはいつている天使てんしは、
 やはり、暗くらがりくらりにいて、ただ車くるまいしが石うえの上うえをガタガタと躍おどりながら、
 なんでもものどかな、田いな舎なみち道みちを、引ひかれてゆく音おとしか聞きくことが
 できませんでした。

箱はこぐるま車ひを引ひいてゆく男おとこは、途とちゆう中ちゆうで、だれかと道みちづれになつ
 たようです。

「いいお天気てんきですのう。」

「だんだん、のどかになりますだ。」

「このお天気で、みんな雪が消えてしまふだろうな。」

「おまえさんは、どこまでゆかしやる。」

「あちらの村へ、お菓子を卸しにゆくだ。今年になつて、はじめ

て東京から荷がついたから。」

飴チヨコの天使は、この話によつて、この辺には、まだところ

どころ田や、圃に、雪が残つていふといふことを知りました。

村に入ると、木立の上に、小鳥がチュン、チュンといふ声を出

して、枝から、枝へと飛んではさえぎつていました。子供らの遊

んでいる声が聞こえました。そのうちに車は、ガタリといつて止

まりました。

このとき、飴チヨコの天使は、村へきたのだと思ひました。や

がて箱はこぐるま車くるまのふたが開あいて、男おとこははたして飴あめチヨコを取り出だして、村むらのちい小さな駄菓子屋だがしやの店頭みせさきに置おきました。また、ほかにもいろいろのお菓子かしを並ならべたのです。

駄菓子屋だがしやのおかみさんは、飴あめチヨコを手てに取りあげながら、

「これは、みんな十銭せんの飴あめチヨコなんだね。五銭せんのがあつたら、そちらをおくんなさい。この辺あたりでは、十銭せんのなんか、なかなか売うれつこはないから。」

といました。

「十銭せんのばかりなんですがね。そんなら、三つ四つ置おいてゆきましようか。」と、車くるまを引ひいてきた若い男わかおとこはいました。

「そんなら、三つばかり置おいていってください。」と、おかみさ

んはいいました。

飴チヨコは、三つだけ、この店に置かれることとなりました。

おかみさんは、三つの飴チヨコを大きなガラスのびんの中にいれて、それを外から見えるようなところに飾っておきました。

若い男は、車を引いて帰ってゆきました。これから、またほか

の村へ、まわったのかもしれない。同じ工場で造られた飴

チヨコは、同じ汽車に乗って、ついここまで運命をいっしょに

してきたのだが、これからたがいに知らない場所に別かれてしま

わなければなりません。もはや、この世の中では、それら

の天使は、たがいに顔を見合わすようなことはおそらくありません

まい。いつか、青い空に上って行って、おたがいにこの世の中で

へ
 経てきた運命について、語り合う日よりはほかになかったの
 あります。

びんの中から、天使は、家の前に流れている小さな川をながめ
 ました。水の上を、日の光がきらきら照らしていました。やがて
 日は暮れました。田舎の夜はまだ寒く、そして、寂しかった。し
 かし夜が明けると、小鳥が例の木立にきてさえずりました。その
 ひもいい天気でした。あちらの山あたりはかすんでいます。子供
 らは、お菓子屋の前にきて遊んでいました。このとき、飴チヨコ
 の天使は、あの子供らは、飴チヨコを買って、自分をあの小川に
 流してくれたら、自分は水の水のゆくままに、あちらの遠いかすみ
 だった山々の間を流れてゆくものを空想したのであります。

しかし、おかみさんが、いつかいったように、百姓の子供らは、十銭の飴チヨコを買うことができませんでした。

夏になると、つばめが飛んできました。そして、そのかわいら

しい姿を小川の水の面に写しました。また暑い日盛りごろ、旅

人が店頭にきて休みました。そして、四方の話などをしまし

た。しかし、その間だれも飴チヨコを買うものがありませんでし

た。だから、天使は空へ上ることも、またここからほかへ旅をす

ることもできませんでした。月日がたつにつれて、ガラスのびん

はしげんに汚れ、また、ちりがかかたりしました。飴チヨコは、

憂鬱な日を送ったのであります。

やがてまた、寒さに向かいました。そして、冬になると、雪は

ちらちらと降^ふつてきました。天使^{てんし}は田舎^{いなか}の生活^{せいかつ}に飽^あきてしま

ました。しかし、どうすることもできませんでした。ちようど、

この店^{みせ}にきてから、一年^{ねん}めになった、ある日^ひのことでありました。菓子屋^{かしや}の店頭^{みせさき}に、一人^{ひとり}のおばあさんが立^たっていました。

「なにか、孫^{まご}に送^{おく}つてやりたいのだが、いいお菓子^{かし}はありませんか。」と、おばあさんはいいました。

「ご隠居^{いんきよ}さん、ここには上^{じょうとう}等^{とう}のお菓子^{かし}はありません。飴^{あめ}チヨコならありますが、いかがですか。」と、菓子屋^{かしや}のおかみさんは答^{こた}えました。

「飴^{あめ}チヨコを見^みせておくれ。」と、つえをついた、黒^{くろ}い頭巾^{ずきん}をかぶった、おばあさんはいいました。

「どちらへ、お送りになるのですか。」

「東 京とうきようの孫まごに、もちを送おくつてやるついでに、なにかお菓子かしを入れてやろうと思おもつてな。」と、おばあさんは答こたえました。

「しかし、ご隠居いんきよさん、この飴チヨコは、東 京とうきようからきたのです。」

「なんだっていい、こちらの志こころざしだからな。その飴チヨコをおくれ。」と、おばあさんは、飴チヨコを三つとも買かつてしまいました。

天使てんしは思おもいがけなく、ふたたび、東 京とうきようへ帰かえつていかれることを喜よろこびました。

あくる日ひの夜よは、はや、暗くらい貨物列車かもつれつしやの中なかに揺ゆすられて、い

つかきた時分の同じ線路を、都会をさして走っていたのであります。

夜が明けて、あかるくなると、汽車は、都会の停車場に着きました。

そして、その日の昼過ぎには、小包は宛名の家へ配達されました。

「田舎から、小包がきたよ。」と、子供たちは、大きな声を出して喜び、躍り上がりました。

「なにがきたのだろうね。きつとおもちだろうよ。」と、母親は、小包の縄を解いて、箱のふたを開けました。すると、はたして、それは、田舎でついたもちでありました。その中に、三つ

の飴チヨコあめがはいっていました。

「まあ、おばあさんが、おまえたちに、わざわざ買かつてくださつたのだよ。」と、母親ははおやは、三人にんの子供こどもに一つずつ飴チヨコあめを分わけて与あたえました。

「なあんだ、飴チヨコあめか。」と、子供こどもらは、口くちではいったものよろこ喜んで、それをば手てに持もつて、家うちの外そとへ遊あそびに出でました。

まだ、寒さむい、早そう春しゆんの黄昏たそがれ方がたでありました。往來おうらいの上うえで、子供こどもらが、鬼おにごっこをして遊あそんでいました。三人にんの子供こどもらは、いつしか飴チヨコあめを箱はこから出だして食たべたり、そばを離はなれずについでいる、白犬しろいぬのポチなに投なげてやったりしていました。その中うちに、

まったく箱はこの中なかが空からになると、一人ひとりは空箱からばこを溝どぶの中なかに捨すてました。一人ひとりは、破やぶつてしまいました。一人ひとりは、それをポチなに投なげると、犬いぬは、それをくわえて、あたりを飛とびまわっていました。

空そらの色いろは、ほんとうに、青あおい、なつかしい色いろをしていました。いろいろの花はなが咲さくには、まだ早はやかつたけれど、梅うめの花はなは、もう香かおっていました。この静しずかな黄たそがれ昏れがた、三人にんの天使てんしは、青あおい空そらに上のぼってゆきました。

その中うちの一人ひとりは、思おもい出だしたように、遠とおく都会とかいのかなたの空そらをながめました。たくさんえんとつの煙えん突とつから、黒くろい煙けむりが上あがっていて、どれむかしが昔むかし、自分じぶんたちの飴あめチヨコせいぞうが製せい造ぞうされた工こう場じょうであつたかよくわかりませんでした。ただ、美うつくしい燈ひが、あちらこちらに、

もやの中なかからかすんでいました。

青あおぐろ黒い空そらは、だんだん上あがるにつれて明あかるくなりました。そして、行く手てには、美うつくしい星ほしが光ひかっていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「赤い鳥」

1923（大正12）年3月

※表題は底本では、「飴《あめ》チヨコの天使《てんし》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

飴チョコの天使

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>